



古墳時代の京都

はじめに

古墳時代とは、「古墳^{こふん}」と呼ばれる高塚が、東北地方から沖縄を除く九州地方までの広い範囲で造営された時代です。

弥生時代に水田経営をめぐる誕生したムラの代表者が、より安定的な水田経営をめざし、集団を大きなものとしていきます。その結果、弥生時代の終わりころには、各地に有力な首長層^{しゅちょうそう}が誕生することになり、やがて、彼らは、穀物に代表される富の蓄積や交易を通じて、大和を中心とした広域な政治的まとまり（ここでは「ヤマト政権」と呼ぶことにする）を誕生させます。

彼ら首長層が権力の証として大きなお墓を築くことを志向し、政治的なまとまりを示すものとして、前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}を築いたのではないかと考えられています。また、前方後円墳は、盛大な首長霊（権）の継承儀礼を行うための舞台であったという考え方も有力です。

国内が大和を中心にまとまったことは、前方後円墳が各地に築かれること以外にも、副葬される銅鏡や石製腕飾類が近畿地方を中心として全国に分布すること、そして炊飯具などの暮らしの道具が地域色を失っていくことから推定できます。



「青龍三年銘鏡」（大田南5号墳：京丹後市教育委員会提供）

古墳時代の京都

古墳時代の墓

古墳の形には前方後円墳以外にも、前方後方墳、円墳、方墳などの墳形があり、その規模や形は、被葬者の政治的・経済的立場を表すものと考えられています。府内には大小1万基程度の古墳がありますが、その多くは、直径10m前後の円墳や方墳で、各地の有力農民層の墓だと推定されます。

古墳時代の始まりについては諸説ありますが、最も古い大型の前方後円墳である奈良県桜井市箸墓古墳^{はしはか}の築造をもって古墳時代の開始とする意見が有力です。この古墳は3世紀中頃の築造であることが、副葬された遺物の推定年代や理化学的な年代測定法により明らかになりつつあります。古墳時代の終わりについては、前方後円墳が築かれなくなり、寺院の造営がはじまる6世紀後半頃とする考え方が優勢です。

京都府は南北に長く、大和政権の発祥の地に近い山城地域、桂川上流域の南丹波地域、由良川流域にあたる北丹波地域、海を擁する丹後地域と地域ごとに様相が違ってきます。

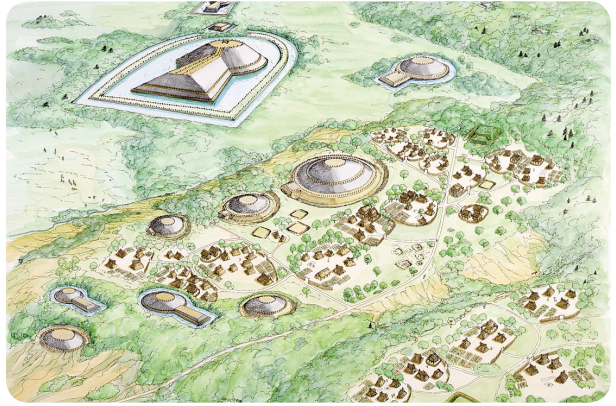
山城地域では、向日丘陵に3世紀後半から4世紀にかけて100m級の前方後方墳（向日市元稲荷古墳^{もといなり}）や前方後円墳（向日市五塚原古墳^{いつかはら}、同妙見山古墳^{みょうけんやま}、同寺戸大塚古墳^{てらどおつか}）が次々と築かれます。同じ頃、



府内最古の古墳のひとつ椿井大塚山古墳

南山城地域では、全長180mを測る大型の前方後円墳である木津川市椿井大塚山古墳^{つばいおおつかやま}が築かれます。この古墳からは、三角縁神獸鏡^{さんかくぶちしんじゅうきょう}33面以上を含む計37面以上の銅鏡が出土しました。三角縁神獸鏡は、全国の首長墳から出土しているもの

と同じ形で造られたものが多いことから、ヤマト政権が全国の首長と同盟関係を結ぶのに深く関わった人物の墓ではないかと推定されています。なお、5世紀になると宇治市から城陽市にかけての台地上に久津川車塚古墳（全長



久津川古墳群の想像復原図（早川和子作画）

180 m）を中心とした久津川古墳群が築造されます。前期の古墳が少ないこの地に府内最大の古墳群が築かれるのは、この頃、ヤマト政権の大王墓が大和から河内に移動することに連動するものと考えられます。

古墳出現以前に全長 52 m の前方後円形を呈する南丹市黒田古墳を築く南丹波地域では、4 世紀後半になって全長 84 m の南丹市園部垣内古墳が出現します。そして、隣接する兵庫県篠山市に全長 140 m の雲部車塚古墳が 5 世紀に築かれる頃には、亀岡盆地にはたくさんの方墳が築かれています。

北丹波地域では、4 世紀に景初四年銘の盤龍鏡が出土した全長 40 m を測る福知山市広峯 15 号墳が築かれて以降、全長 30 m 前後の前方後円墳が小水系ごとに築かれています。この地域は円墳や方墳が優勢な地域で、5 世紀には綾部市私市円山古墳（直径 71 m）や同聖塚古墳（一辺 54 m）、福知山市妙見古墳（一辺 43 m）などがこの地域を代表する古墳です。

丹後地域では、4 世紀の中頃から 5 世紀前半にかけて、大きな前方後円墳が築かれています。最初に野田川流域に与謝野町白米山古墳、同蛭子山 1 号墳が築かれ、5 世紀を前後する頃には大きく海

古墳時代の京都



府内最後の古墳のひとつ綾部市山尾古墳



八角形墳（亀岡市国分 45 号墳）

が入り込んでいた潟湖^{かたこ}のほとりに、日本海側最大の前方後円墳である京丹後市銚子山古墳^{ちょうしやま}、同神明山古墳^{しんめいやま}が築かれます。その後、竹野川河口をさかのぼった内陸部^{くろべちやうしやま}に黒部銚子山古墳が築かれますが、それ以降この地域には大型の前方後円墳は築かれません。

京都府内最後の前方後円墳は、6 世紀後半に築かれた巨大な横穴式石室をもつ京都市右京区^{へびづか}の蛇塚古墳です。6 世紀には、府内各地に横穴式石室や木棺を埋葬施設とする群集墳が築かれ、6 世紀後半には、丹後半島の中央部、綾部市、八幡市、京田辺市と限られた地域で横穴墓

群が築かれています。群集墳や横穴墓群は、飛鳥時代にまで造墓活動が続くものがあります。階段状の列石で化粧された綾部市山尾古墳^{やまお}や八角形の墳形をもつ亀岡市国分 45 号墳^{こくぶ}などは、律令国家に移行しつつあるヤマト政権から認められた地域首長と考えられます。

古墳時代のムラ

古墳時代の人々の多くは、弥生時代に引き続いておもに堅穴式住居で暮らしていますが、5 世紀頃には屋内炉に代わって竈^{かまど}が一般化するようで、南丹市室橋遺跡^{むろはし}などでは、竈付き住居が多数見つっています。堅穴式住居跡とともに、掘立柱建物跡が見つかることもあり、これらは、米などを蓄えた高床の倉庫の可能性も考えられま

す。多数の掘立柱建物跡とともに、朝鮮半島系土器、鍛冶滓、製塩土器などが出土した精華町森垣外遺跡では、平地式の大壁住居なども見つかり、渡来系技術者集団の集落内での居住が推定されます。しかし、このような集落は少数派で、府内で掘立柱建物が一般化するのには飛鳥時代以降になります。



木を割り抜いて作られた導水施設（浅後谷南遺跡）

祭祀行為に係ると考えられる遺構も幾つか見つかり、向日市中海道遺跡では、建物の周りを堀で囲んだ神殿風の建物が見つかり、京丹後市浅後谷南遺跡では、古墳を飾った形象埴輪に表現されているような導水施設が見つかり、水に係る祭祀行為に使われたものと考えられます。宮津湾の出口に近い宮津市難波野遺跡での多量の土器と玉類の出土状況や、舞鶴湾の出口にあたる舞鶴市千歳下遺跡での銅鏡片、玉類、鉄製品、土器などの集約的な出土状況は、海上交通の安全祈願などに係る祭祀行為の結果だと考えられます。

府内での水田遺構の検出は多くありませんが、古墳の築造に係る大規模な土木工事技術の存在から水田開発も飛躍的に進んだことが予想されます。亀岡市池尻遺跡や南丹市室橋遺跡で見つかった幅3m、深さ2mを測る大型の溝などは、灌漑用水路の可能性が考えられます。ヤマト王権が大陸から技術者を迎え、地方豪族の招聘の下、鉄生産、須恵器生産、埴輪生産などが府内各地で行われています。6世紀には、京丹後市遠處遺跡で砂鉄を原料とした鉄生産、南丹市大向窯跡群で須恵器生産、木津川市の平城山丘陵で埴輪生産などが行われています。

（肥後弘幸）